リレー・エッセイ１６３

現在・過去・未来

後藤隆徳

わが国の近代登山はすでに８０年近い歴史をもっている。その創立期に活躍したのは、社会的・経済的に恵まれた青年たちであったが、１９３０年（昭和初期）には国民的なスポーツ・レクレーションとして発展する道をたどりはじめていた。だが登山の正常な発展は、軍国主義の支配と侵略戦争の拡大によって著しく阻害された。

戦後、わが国の登山はかってない発展の時期をむかえた。社会の民主的改革をめざす諸運動の高揚とその成果が文化・スポーツの分野でも新しい発展をうながしたからである。

だが、国や自治体、既存の山岳団体はその新しい状況に対応することができなかった。登山の新しい発展を担うべき新しい理念と組織が求められたのである。日本勤労者山岳連盟は、１９６０年（昭和３５年）、登山を愛好する進歩的な人々によって「勤労者山岳会」が結成され、勤労者により新しい登山運動が提唱された。その運動は短期間に全国に広がり、１９６３年「日本勤労者山岳連盟」が結成されるに至った。

「日本勤労者山岳連盟」は、わが国の登山の優れた伝統を継承するとともに創造的な活動を展開し、登山の発展に力を尽くしてきた。そして今日、日本の登山界のなかで揺るぎない地歩をきずいている。　**（日本勤労者山岳連盟・趣意書前文）**

「働く仲間の山岳会」「安く、楽しく、安全に」「ハイキングからヒマラヤまで」「育てよう緑、守ろう自然」などのスローガンで結成された日本勤労者山岳連盟は今年５０周年の記念すべき年を迎えた。５０年の長い歳月、労山を支えて来たのは、多くの地位も名誉も金もない勤労者であった。

今でこそ登山・ハイキングは国内・外を問わず全く問題なく何処でも行ける時代であるが、それほど遠くない以前休暇はない、金もない、当然車など持てない時代だった。私が丹沢に行き始めたころは、御殿場線の蒸気機関車で行った。下土狩駅で乗車し松田駅で小田急に乗り換えて渋沢駅で降りる。ここからバスで大倉まで行ってやっと登山開始となる。今こんな登山をやったらこれだけで疲れてしまう。そんな話を時々若い人や定年ハイカーに話してもピンとこないようだ。水無川の沢を一本やって大倉尾根を下り往路を帰る。誰もいない御殿場線でその日の登山を振り返りビールを開ける。

現在とは山行の持つ重さが違った。一回の山行に費やすエネルギーが違うのである。先日は八ッ・硫黄岳を日帰りしたが、長泉を５時に出て８時登山開始。硫黄岳頂上に

１２時に立つ時代なのである。高速道路があり、ちょっとばかり気のきいた車があれば出来る芸当である。

２０代後半から「労山運動」にかかわって来た。労山は「活動」でなく「運動」だ。活動と運動の違いを問われれば、動物は活動をするが運動はしない。運動は人間だけのもので、人間だから行う行為だ。前出の趣意書にある、例えば「権利としての登山」を実現させるために労山として様々な運動を展開して来た。平和行進もそんな運動のひとつである。今労山が５０年あるのは、そうした地道な運動が実を結んだものと言える。

さて全国連盟の組織は、北は北海道から南は沖縄まで約２５０００名の会員を擁した時期があった。しかし、昨今の「会員の高齢化・組織離れ・人間関係の希薄化」等で大幅に会員数を減らしている。その中で以前、私が理事長時代討議され廃案になった、個人会員制度が今年の全国総会で再提案された。しかし、「一年間論議して決定する」を「一年間論議して検討する」に修正された。これは４月号登山時報の総会発言抄に詳しいが難しい問題で全国連盟と地方連盟の温度差は大きい。

会員減はわが会でも同様の課題となっている。１６年の歴史で８０名近い会員が在籍したこともある。しかし来期は４０名を切っている。しかし、地元を見れば未組織登山者は多い。具体的には五十雀山歩会・南校同窓会（以上正式名称は不明）・さわやかハイキングなど、ザッと見ても１００名は下らないだろう。一割組織化すれば１０名は増える。が、実際現状に満足している場合は他組織に移籍は難しい。従って組織拡大はまだどこの組織にも在籍しない登山愛好者の入会可能性が大きい。その辺りに狙いを絞って会員拡大を展開すべきだろう。一般参加の間接経費が廃止され一般参加を促しやすくなったのは前進である。

会は１７期を迎える。今回、規約の大幅見直しが行われ改定された。会が出来たのは１９９４年２月。一番古い規約は１９９７年８月のもの。その間、今日まで様々な問題が生じ仔細が加えられ現在に至った。それは特殊な作り方をされたものでなく、会全体で練り上げ承認してきたものだ。しかし、時代にそぐわない部分・常識的な個所など削除され、表現を少し変えた個所もある。

ただ、１６年前に会創立の理念は今後も労山として運動・活動を継承して行く以上残して行かなければならなく譲れない部分である。１６年前東部ブロックの支援を受け労山として創立された山の会。この理念・精神は未来永劫。どんな状況になっても変えられるものでなく、変えてはならないものである。

（２０１０．０３．２０）